

マザリーズと育児語の意義  
—子育ての知恵の形成という観点から—

山 田 葉 里

## 要旨

本論文は、大人が赤ちゃんに語りかける特徴的な発話である「マザリーズ」と「育児語」に焦点を当て、こうした音声コミュニケーションがどのように身につけられ、どのように使われているのかを実証的に明らかにした。

マザリーズも育児語も、従来知らず知らずのうちに使用されてきたいわば「子育ての知恵」的な対乳児発話であるが、近年こうした発話に科学的立場から注目が集まっている。論文では、はじめにマザリーズと育児語の意義に関わる先行研究を概観し、それらが母子の情動的な絆の基盤をつくり、言語獲得の助けとなる素地をつくり、母親の精神衛生にも影響することがわかった。

こうした科学的知見を踏まえ、特徴的な対乳児発話の伝承および使用の実態および機能を明らかにするための二つの調査を行った。

一つ目の「育児語に関する調査」は、質問紙を用いて将来母親になる可能性のある女子大学生を対象に行った。その結果、女子大学生の育児語の知識が30年前と比べて減少していること、女子大学生にきょうだいがいるかどうかで育児語の知識に差が出ることがわかった。

二つ目の「母子間における音声のやりとりに関する調査」は、家庭の子育て場面を対象に行った。マザリーズ音声は顕著にみられた三つの場面を取り上げて分析した結果、母子が相補的に音声を引き出し合い、互いの情動が共有される状態にマザリーズが深く関わっていることがわかった。子どもに向ける発話は、子どもとの相補的な関係の中で引き出されるものである。そのような関係の中で、マザリーズや育児語の意義や知識を形成されることが望ましいと言えるのかもしれない。

「子育ての知恵」的な発話であるマザリーズと育児語は、従来問題視されることのなかった現象である。それらが今注目される背景には、赤ちゃんへの声かけの仕方がわからず悩む母親が増えているという実態がある。本論文では、この悩みを答える具体的な方策を導出するまでには至らなかった。子育てに携わる大人がマザリーズや育児語を「子育ての知恵」として自然に学習する環境をどのように整えていくかを今後の大きな検討課題とし、研究を発展させていきたい。

## 1. はじめに

近年、赤ちゃんへの声かけや話しかけをどうすればいいのかわからない、あるいは苦手であるといった悩みをもつ養育者がいる<sup>1</sup>。こうした背景の中、マザリーズや育児語といった昔から暗黙裡に使用されている「子育ての知恵」的な音声コミュニケーションに科学的な立場から注目が集まっている。

従来、マザリーズや育児語といった声かけや話しかけは、特段意識的にではなく自然に行われてきたものなのではないだろうか。

こうした状況の中で、子育ての知恵とも言えるマザリーズや育児語が実際に子育て場面でどのように使われ、どのような意味をもっているのかについての実証的な研究は少ない。私たちがマザリーズや育児語をどのように子育て場面で使い、それらが赤ちゃんとの関係性にどのような意味をもたらすのか、を精査する必要がある。このことは、赤ちゃんとの関わり合い方に悩む養育者へのサポートの方策を考えるための一助ともなるであろう。

## 2. 研究の目的と方法

本研究は上述の問題意識のもと、母親と赤ちゃんの音声コミュニケーション、中でも赤ちゃんに対して母親が用いる特徴的な音声であると言われるマザリーズと育児語に焦点を当て、「赤ちゃんに対する大人の特徴的な声かけや話しかけ」の実態と意義を明らかにし、今後の子育て支援に有益な示唆を得たい。

この大きな目的のもとで、具体的に以下3点について詳しく検討した。

① 女子大学生と子育て中の母親を対象に「育児語に関する調査」を行い、

山田 栞里

その知識と意識を分析する。2つの調査結果の分析と検討、並びに両者の比較、さらには先行研究との比較を通して、「育児語」の知識がどのように共有され、伝承されているのかについて明らかにする。

- ② 家庭の子育て場면을対象に「母子間における音声のやりとりに関する調査」を行い、マザリーズと育児語がどのように使われ、どのように機能しているのかを明らかにする。同時に養育者へのインタビューも行い、どのような意識をもっているのか等を明らかにする。
- ③ ①②の結果を基に、今後の子育て支援に向けて、赤ちゃんへの関わり方(特に声かけや話しかけを中心に)をめぐるどのようなサポートが必要となってくるのかを検討する。

### 3. マザリーズと育児語

#### (1) マザリーズの定義

私たちは赤ちゃんに話しかけるときの、普段よりも声を高く、おおげさな抑揚でゆっくりと話す傾向がある。こうした現象は、ほぼすべての文化圏において普遍的にみられることがわかっている (Ferguson, 1964: 正高, 1993)。文化人類学者ファーガソンはこの現象をマザリーズ (motherese) と命名し、正高 (1993) はこれを「母親語」と訳している。近年では、話者を母親に限定しない配慮から対成人発話 (ADS = Adult Directed Speech) に対して対乳児発話 (IDS = Infant Directed Speech) と呼ぶことが学術的に最も中立的な立場とされる傾向がある (松田, 2015: 志村, 2004)。

本研究は、赤ちゃんに向けられる特徴ある音声をめぐる複数の研究成果を受けて (松田, 2015: 中川・松村, 2006)、女性・母親なるものところうした音声とが深い関わりをもつのではないかと考え、マザリーズの語を用いる。

## (2) マザリーズの特徴

志村(2004)は、これまでの研究を概観し、マザリーズの音響的特徴を6つあげている。

- ① 基本周波数(F0)<sup>2</sup>の上昇:音声そのものの基本周波数全体が上昇する。乳児の発声に同調した高さの声になる傾向があり、結果的に声は高くなる。
- ② 基本周波数(F0)の変化範囲の拡大:普段の大人同士の会話音声(ADS)よりピッチ(高さ)の上下(抑揚)が大きくなる傾向がある。
- ③ 発話速度の低下:語りかけの言葉は大人同士での会話で使われる言葉より短い言葉で、発話速度の低下傾向がある。
- ④ 語尾の上昇パターンの増加:言葉の語尾を上げる上昇パターンの増加傾向がある。
- ⑤ 繰り返しの増加:同じ言葉が繰り返される傾向がある。
- ⑥ 発話間の潜時:語りかけのタイミング(潜時)が乳児の発声を待ったり、引き出したりするような時間特徴を有し、乳児の発声行動を活発化することがある。

マザリーズは以上に示したような特徴すべてを具備した発話のみを指すのではなく、これらの特徴の1つあるいは2つを備えたものもマザリーズとして考えられている(p.630)。

## (3) マザリーズの意義

志村(1996, 2000, 2004)、松田(2015)、児玉(2015)の見解を総合して整理し、マザリーズの意義を筆者は次の5つにまとめることができると思う。

### i. 「感情を支えるコミュニケーション」を支える

音声言語を中心としたコミュニケーションにおいて、私たちはどのような情報を得ることができるのだろうか。志村(2000)はその情報を、

山田 菜里

言葉そのものが生み出す意味や内容を担う「言語情報」と、話者の感情や情緒を伝達する感性にかかわる「非言語情報」の2つに分類している。ナップ(1979)もまた、音声を非言語情報のひとつとして捉え、相手の情緒の状態などを推断する手がかりとして位置づけている。

では、音声の何によって感情や情緒の伝達を可能としているのだろうか。ナップ(1979)は、声の高さ、速さ、大きさなどをその手がかりとして考えている。これらの手がかりはプロソディ<sup>3</sup>要素であり、音声の中に含まれる「プロソディ要素」が感情や情緒との繋がりを生み出している、と言えよう。

しかしながら、プロソディに特徴があれば感情が伝わるというものではないという点に注意が必要である。松田(2015)は、感情を一定にした状態で赤ちゃん(6ヶ月)に話しかけた場合、マザリーズであっても好まないことを例に挙げている。一方で、対成人音声であっても、快の感情を十分にのせて話せば、赤ちゃんはマザリーズよりも好むことがわかっている(p.23)。つまり、意図的にマザリーズをつくって話しかけるだけでは、感情の伝達や共有は起こらず、感情が伴ってはじめて意味をなすものであると考えられる。

気持ちが込まるからこそそのマザリーズであり、マザリーズによって気持ちがさらに伝わる、ということがわかる。養育者と赤ちゃんが互いにかかわりを求めようとするとき、ポジティブな気持ちを交換することが多い。このポジティブな気持ちを共有することを鯨岡(1997)は「共有の快」と呼んだが、この「共有の快」に通ずるものであるといえよう。情動を基盤とした双方向的な関係を構築していくための足がかりとして、養育者のマザリーズが機能すると考えてよいのではないだろうか。

## ii. やりとりを誘発し、活性化する

赤ちゃんは2ヶ月頃になると、動いている物体を目で追うようになり、社会的微笑やクーイング<sup>4</sup>と呼ばれる音声が発現したりする。こ

の時期から、養育者のマザリーズは強化されていくと考えられる(庭野, 2005)。

岡本(1982)は、母親や応答者と赤ちゃんのやりとりを「サイクルの交換」と呼んでいる。この岡本の言う「サイクルの交換」は、図1のように示すことができる。

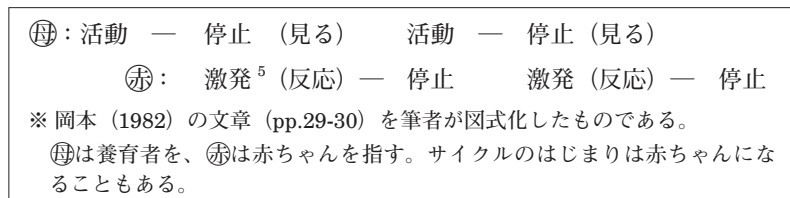


図1 母子相互作用におけるサイクルの交換

赤ちゃんが1人の対象者に関わろうとするとき、赤ちゃんの基本的な活動や母親、応答者の活動は各々が同系列を成し、サイクルのように繰り返される。岡本はこのサイクルを2つの歯車のように噛み合っていく過程であるとし、「まさにコミュニケーションの典型であり、話し手の役割と、聞き手の役割を相互に交換しながら二人の関係を深めていくという[対話] (dialogue) の原型をそこに見ることができる」(p.30)と、述べている。この対話とも言えるサイクルを活発化させる要因のひとつとして、養育者の発する音声のリズムとプロソディ要素が挙げられるのではないだろうか。

発達心理学者のマロックとトレヴァーセン(2009)は、サイクルが活性している状態を「愛情と喜びの感情に統制された意識の共有」(p.2)と、言っている。マロックとトレヴァーセンは、赤ちゃん(6ヶ月)と母親のやりとりの音響分析から、その意識の共有は「調整された動きのリズムというかたちで表現され、有意味な形式」(p.2)に支えられていることを示した。

養育者の音声のピッチの変化や抑揚、リズムがメロディアスであるこ

山田 菜里

とによって、コミュニケーションが活性化し、赤ちゃんと養育者の関係がより緊密になっていくのである。

### iii. 学習のきっかけを促し、学習の状態を支える

赤ちゃんのマザリーズへの反応として、マザリーズを「好む」、「選ぶ」、マザリーズに「注意する」ということが挙げられるが、これらの赤ちゃんの反応そのものが学習を支えるきっかけとなっているようだ。養育者の働きかけに「注意する」という赤ちゃんの行為に注目するならば、赤ちゃんの注意行為が社会的な学習行為へと変化していく過程は、赤ちゃんが養育者との相互作用場面に外界の物や出来事を組み込み始めるようになることと相まっている(レギアスティ, 2014)。

そのような物や出来事が組み込まれていく相互作用場面において、養育者が赤ちゃんの名前を呼んだり、相互に視線合わせをしたりする様子が頻繁にみられるようになる。このような養育者と赤ちゃんの行為は、同時空間に存在する物や出来事を互いが了解可能なものにしやすいしている。発達心理学的には、このことを共同注視と呼び、マザリーズは共同注視を生じやすくするための働きかけのひとつとして報告されている(松田, 2015)。

音声は、直接的に接触していなくても赤ちゃんに届くという利点がある。母親と赤ちゃんとの距離を置き、かつ離れたものを共有することができるという点で、音声によるコミュニケーションは共同注視をより活性化し得るといえよう。常田(2007)は、共同注視の延長線上に「視線の動きや表情・発声を用いてその対象にまつわる情動的メッセージを相手に伝えることにより心内対象を共有している」状態、共同注意があることを母親と赤ちゃん(満2～9ヶ月)の縦断的な観察から考察している(p.98)。

共同注視が自然に養育者と赤ちゃんとの間で交わされるようになった後の、養育者と赤ちゃんの非言語情動的なやりとりは、赤ちゃんが関わ



りをもととする対象との状態をも支えている。非言語情報のひとつとしてのマザリーズがここでも大切な役割を果たしていることが推測される。

#### iv . 母語の獲得を支える

近年、マザリーズのリズムとプロソディ的側面が、音声を言語として処理し理解する手がかりとして働いていることが、明らかになりつつある。

生まれて間もない赤ちゃんにも、母語となる言語の音韻に加え外国語の音韻も弁別できるユニバーサルな聴覚をもっていることが明らかになっている(梶川, 2003; 林, 2005; 麦谷, 2009)。しかし生まれて間もない赤ちゃんには、同じリズムのグループに属する言語同士の弁別は難しいとされる。その一方で、グループの異なる言語同士の弁別は容易であるようだ。4ヶ月頃になると、赤ちゃんは同じグループから母語だけを差別化できるようになり、身近な存在である養育者の音声特徴を知覚できるようになる(梶川, 2003; 林, 2005; 麦谷, 2009)。

赤ちゃんの耳に入る音声は、一般的な聴取処理の機構から言語処理へ特化されていく過程の発端に、リズムとプロソディ要素が関係していると言えよう。そのため、リズムとプロソディ要素の輪郭がはっきりとしているマザリーズ音声は、赤ちゃんの母語の獲得を促し得る。

#### v . 養育者の脳活動にも影響を及ぼす

マザリーズは赤ちゃんにとってだけでなく、養育者にとっても意味のあることがわかってきた。養育者におけるマザリーズの脳内処理を調べた馬塚ら(2010)によると、マザリーズは単に気持ちの高揚の表れというだけではなく、言語の伝達意図の強さとも関わっているというのである。生後6～11ヶ月児の母親にマザリーズを聴取してもらい、その脳反応を測った結果、実際にマザリーズを話していないにもかかわらず、あたかも話しているかのように言語野で高い脳活動が示されたのである。

山田 菜里

馬塚ら（2010）は、自然にマザリーズを話すことを困難にする産後鬱の女性とマザリーズの脳内処理とを結びつける考え方を示唆している。松田（2015）は、マザリーズの根底には、コミュニケーションの調整能力があり、マザリーズを当たり前の現象として使えるかどうかということが、このコミュニケーションの調整能力と関係しているのではないかと推論している（p.29）。

子育てに困難を感じたり、ストレスを抱えたりすることと、マザリーズとの関係性は未だ明確ではなく、短絡的に因果関係に結びつけることは避けなければならない。しかしながら、マザリーズ音声を発したり、聞いたりすることと、特に母親のメンタルの状態との関わりが示唆されていることは注目しておく必要があるだろう。

#### (4) 育児語の定義

大人が乳幼児に対して、犬のことを「わんわん」、車を「ぶーぶー」、手を「おてて」、寝るという動作を「ねんね（する）」、といったりする傾向がある。かつて、こういった言葉は「赤ちゃん言葉」や「幼児語」と呼ばれ、赤ちゃんと幼児が使用主体であるかのように捉えられてきた。しかし、養育者もまたこれらの言葉の使用主体であることに着目した村田（1960）は、「わんわん」や「ぶーぶー」といった特徴ある言葉が、乳幼児の言語獲得の一条件としてはたらき得ることを示し、そうした言葉を「育児語」と命名した。村田が名称化した「育児語」の概念は、多くの研究者たちに引き継がれている。

#### (5) 育児語の特徴

日本には、全国共通的に使用されている育児語があれば、それぞれの地域に根付く育児語もある（友定，1997）。ここでは、次節と関連づけるために早川（1981）や小椋ら（2007）を参考に、育児語の特徴を4つにわけて説明する。

- ① 反復形が多い:「わんわん」「ぶーぶー」などのように同種の音韻が繰り返されることである。
- ② 擬声語・擬態語が多い:形態としては、①の特徴と同様、反復形式が多い。「わんわん」「ぶーぶー」はまさにそうである。動物の声や物事の様子などを言語音で表すことである。
- ③ 接頭辞「お」／接尾語「さん・さま・ちゃん・くん」を付加する傾向にある。
- ④ 語の汎用が目立つ:特定の語が複数の人・モノ・コトを示すことである。たとえば、「まんま」が「母親、ミルク、離乳食、間食」などの複数を指示することがある。

## (6) 育児語の意義

早川(1981, 2006)、小椋(2006, 2007)の見解を総合した上で整理し、育児語の意義を筆者は次の4つにまとめることができると考える。

### i. 音声模倣を促進する

赤ちゃんは半年を過ぎる頃、「ba ba ba」「da da da」というように子音と母音が通常の言語音と同様に安定したタイミングで発することができるようになる。この現象は、同じ音節が反復されることが多いため、規準喃語もしくは反復喃語と呼ばれる(庭野, 2005; 早川, 1981, 2006)。こうした規準喃語の反復という特徴は育児語にも共有される特徴である。

早川(2006)は、一人の子どもの縦断的な観察から、初期にみられた喃語は指示対象をもたず、養育者に何か訴えようとするものではなかったが、7ヶ月では「まわりに親がいることがなん語発声の刺激要因になってきていてまったくの音声遊戯とだけは言えないところまできている」(p.65)と、報告している。この事例は、反復性のある喃語が音声模倣に先立つ発生であることを示している。

庭野(2005)もまた、反復性をもつ喃語と子どもの初語には、音韻面

山田 菜里

において類似性があることを取り上げ、音声言語の成立において反復性をもつ喃語の出現が、特に密接に関連していることを述べている（pp.16-17）。

赤ちゃんのこうした発声特徴を踏まえると、育児語の特徴のひとつである反復形は、赤ちゃんにとって興味を引く形であり、音声の模倣を促進していることがわかる。

## ii . 語の切り出しを支え、記憶の固定化を促進する

人が話す連続的な発話から言語情報を得るためには、その統語構造を認識する必要がある（梶川, 2003）。赤ちゃんは、その統語構造を組織する語の音系列を群化及び分節化し、特定の語の音系列を記憶している。このことを「語の切り出し能力」という（林・馬塚, 2010）。林（2003）は、日本語を学習する赤ちゃんにおける語の切り出しにおいて、育児語彙中に多く含まれる特殊拍「っ・ー・ん」<sup>6</sup>に注目し、その可能性を2つの月齢群に分けて検討した。

この研究の結果、8～10ヶ月の赤ちゃんは、特殊拍を含む語を有意に選好聴取することがわかった。しかし、4～6ヶ月の群では認められなかった。ここから、7～8ヶ月頃には育児語に特徴的なリズム構造に対して感受性が高まることが示唆されたのである（p.32）。その後、林・馬塚（2010）によって、5～13ヶ月の赤ちゃんを対象とした語の切り出し能力の発達について検討されている。その際、特殊拍「っ・ー・ん」を含む語に加え、育児語の特徴を示す接頭「お」や接尾「ちゃん」を含む型もターゲット語として追加されている。この研究からは、語のリズム構造や接頭語、接尾語などの手がかりがあることによって、7ヶ月以降から語の切り出しが行われ、再認されている可能性があることがわかっている。

こうした実験結果から、育児語は半年を過ぎた赤ちゃんにとって、語の切り出しがしやすく言語学習の助けになる語彙であることがわかった。

### iii . 指示対象の象徴記号への橋渡しとしてのオノマトペ

私たち大人が通常使用する言葉は、音声と意味との関係は恣意的であるという大原則のもと、存在している(友定, 2005)。恣意性のある言葉を使えるようになるためには、意味するもの(能記)と意味されるもの(所記)との関係を成立させ(早川, 1981)、音声をシンボルとして使いこなす象徴機能の形成をまたなければならない(岡本, 1982)。その過程を経て、はじめて言語使用が開始されるということになる。

早川(1981)は、「記号関係の形成にとって重要なのは、能記と所記との関係を自然的なもの(信号)から恣意的なもの(記号)へと移行させることである。この移行の契機となると考えられるのが、両者にまたがる性質をもつ、類縁的関係にある象徴の獲得である」(p.55)と述べている。中でも、育児語に多くみられる擬声擬態語(オノマトペ)は指示対象を具体的に表象することと指示することの両方の働きを持つことで、能記と所記との間の象徴的なつながりの形成途上に位置すると、子育ての現場から考えられてきた(早川, 1981; 岡本, 1982)。

認知科学的な側面からも、擬声擬態語が言葉の獲得の足がかりとして働いている可能性が示唆されはじめている。浅野(2015)は、擬声擬態語に加え、何らかのイメージと結びつく言語音のことを音象徴(sound symbolism)という言葉でまとめている。浅野らが行った実験によると、赤ちゃん(11ヶ月)がはじめて聞いた言葉の意味を判断する際に、指示対象との音象徴的な一致性を頼りにしていることが結果としてわかっている(2015)。確かに、擬声擬態語に由来する「わんわん」という育児語は、「犬」という恣意的な象徴記号への橋渡しになりうるだろう。「にゃんにゃん」と「猫」、「ぶーぶー」と「車」も同じことが言えるだろう。

### iv . 概念形成を支える

育児語に見られる汎用は、個々に存在するモノやコトを一つの価値や意味で関連付け、体系化する働きを持ち、大人の側で意図的に作り出さ

山田 菜里

れる側面を持つ(友定, 2005)。

早川は、広島で行った調査から「あはれ」に由来するであろう「あっぱい」という育児語が「花・リボン・血・赤い・火・きれい」と、あまねく用いられていることを確認している。その実態から「あっぱい」を指す対象は、「美しいもの」「赤いもの」を括っており、概念形成を支えているのではないかと示唆されている(1981)。

こういった汎用は、大人の側のみでなく、有意義な言葉話すようになる道筋における子どもの側でもみられることがわかっている。それは岡本(1982)が行ったN児(特に9~12ヶ月)の「ニャンニャン」の使用に対する縦断的な観察からみてとれる(pp.135-142)。N児の中で意味をもつようになった「ニャンニャン」という言葉は、「象徴的意味を持ちはじめるとともに適用範囲が拡大される一時期を経て、特殊化し、さらに社会的な慣習語がそれにとって変わっていく」(p.135)。

このように、特定の語の汎用は大人にも子どもにも使用されることが認められる。村田(1960)は、育児語の汎用は、「幼児語に対する命名的あるいは機能的概括学習の契機を作る」(p.38)ことに寄与すると述べる。早川(1981)もまた、「育児語の汎用は、モノの名の教示よりも、モノへの構え、態度、見方を育てることに留意されており、そのことが概念形成を促すのである」(p.54)と述べている。

子どもが汎用的に用いる幼児語は、岡本のN児の観察でもみられるように、子どもなりの言葉の規則に基づいて使用されている。しかし、その「子どもなり」の中には、大人の概念形成を支える育児語のヒントが自ずと含まれているのである。大人は、子どもが話すような言葉に近い言葉をもってして、子どもの発達段階に即した概念形成を支え、子どもはその言葉をヒントに、長い時間をかけて概念を形成していくのである。

## 4. 育児語に関する調査

### (1) 調査目的

この調査は、将来母親になる可能性のある女子大学生と子育て中の母親を対象に、女性がもつ育児語に関する知識や意識を、明らかにすることを目的とする。ここでは、女子大学生がもつ育児語に関する知識について検討する。

### (2) 調査方法

**調査者** アンケートの作成、配布回収等は筆者が行った。

**対象と方法** 調査対象は、本学の学生である。75名に質問紙を配布し、計67名から回答を得た(回収率89%)。

**期間** 調査期間は2015年7月、2016年1月～3月である。

**内容について** 友定(1987)と村田(1960)の調査を参考に語を決定した。回答は、成人語に対応して知っている育児語をすべて記述してもらった。先行研究により、女子大学生の育児語の回答は、個人差が著しいことがわかっている。友定(2005)は、身近に幼児がいるかどうかなどの条件でその差が生じるのであろうと予測した。今回の調査では、女子大学生に0～2歳の子どもの面倒を見た経験があるかどうかなど尋ねてみた。それに加えて、女子大学生の所属学科やきょうだい<sup>7</sup>の有無も尋ねてみた。

**倫理的配慮** 調査は、「聖心女子大学研究倫理指針」「聖心女子大学における『人を対象とする研究ガイドライン』」に則り、「教育学科 研究倫理細則」に定める教育学科研究倫理審査委員会の審査を経て承認を受け、実施した。

### (3) 調査結果と考察

特筆すべきと考えた結果2点について述べたい。

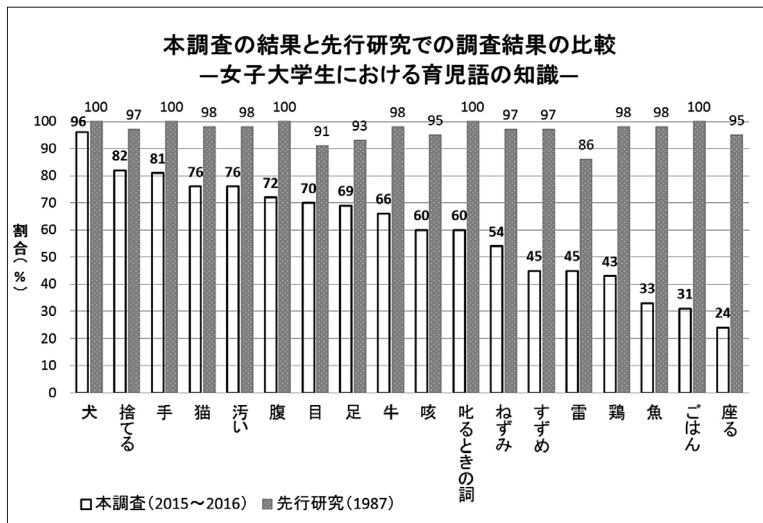


図2 本調査の結果と先行研究での調査結果 (%)

1つ目は、今回行った調査と先行研究(友定, 1987)の調査を比較した結果、将来母親になる可能性のある女性の育児語の知識が減っているという点である。比較対象となった語は、全国共通語と推測された18語<sup>8</sup>である(村田, 1960: 友定, 1987)。図2からわかるように、およそ30年経った今、全国共通語と言われるそれらの語でさえ知っている女子大学生が減少していることがわかった。

2つ目は、きょうだいの有無といった環境の違いが育児語の知識の形成に影響している可能性が明らかになったことである。女子大学生にきょうだいがいるかどうかによって、育児語の知識(該当の育児語を知っているかどうか)に有意な差が認められるかを、カイ二乗検定を用いて検討した。統計解析はSPSS Statistics Ver.21を用い、統計的有意水準は5%未満とした。

その結果、きょうだいがいるかどうかの条件で、その知識に有意な差が認められたものがあつた(表1)。きょうだいがいる人の方が、有意に「捨



てる ( $p<0.001$ )」「吐き出す ( $p<0.05$ )」に相当する何らかの育児語を知っている割合が高いことがわかった。きょうだいの存在が育児語の知識に影響している可能性が示された。

表1 きょうだいの有無の違いによる育児語を知っている回答者の割合 (%)

	きょうだいがある (n=53)	きょうだいない (n=14)	p値
手	83	71	0.329
腹	72	71	0.984
足	66	79	0.369
目	75	50	0.064
咳	62	50	0.405
頭	11	0	—
犬	96	93	0.588
牛	62	79	0.253
鶏	45	36	0.520
猫	77	71	0.643
魚	38	14	0.097
すずめ	47	36	0.443
ねずみ	53	57	0.773
靴	62	57	0.727
母乳	57	43	0.359
めん類	32	29	0.802
ごはん	40	36	0.790
月	53	29	0.106
雷	45	43	0.871
太陽	34	50	0.270
神様・仏様	4	0	—
立つ	60	50	0.484
捨てる***	91	50	0.000
座る	25	21	0.809
寝る	89	79	0.324
吐き出す*	77	50	0.043
汚い	77	71	0.643
叱るときの詞	62	50	0.405
テレビのリモコン	25	14	0.414
iPhone・スマートフォン	15	0	—

注1) nは対象者の数を表す。

注2) 各育児語の項目について、「きょうだいの有無」が育児語の知識に影響するかどうかについてカイ二乗検定を行ったときのp値を示す。便宜上、回答者割合の結果の表に併記しているが、検定には度数を用いて解析を行っている。星(\*)1つは、 $p<0.05$  (5%)を示し、星3つは、 $p<0.001$  (0.1%)を示す。

山田 栞里

## 5. 家庭の子育て場面におけるマザリーズと育児語

### (1) 調査目的

母子間における音声コミュニケーションの実際を知り、その中でマザリーズや育児語がどのような役割を果たしているのかを、明らかにすることを目的とする。ここでは、母親が記録した音声を分析、検討し、考察を行った一場面を紹介する。

### (2) 調査方法

**対象** 対象者は、本調査に同意を得られた2組の母子である。「母子間における音声のやりとりに関する調査」といったテーマを示し、本研究の趣旨を説明して依頼した。子どもはいずれも8～9ヶ月の男児で、第一子である。

**方法** 録音機を用いた音声の記録を行った。音声の録音については、録音機を家庭に預け、母子ともに余裕のあるときに、任意に録音して戴くよう母親へ依頼した。録音場面については、①食事（授乳・離乳食・間食等）②遊び ③着替え ④オムツ替えの4場面を予め設定して可能な限りこれらの時間は録音機のスイッチを入れて戴くよう依頼し、あとは自由とした。

**倫理的配慮** 「4. 育児語に関する調査」に同じ。

### (3) 調査結果と考察

#### i. 育児語について

育児語に関しては、両者とも「育児語に関する調査」で取り上げたような育児語の目立った使用を確認することができなかった。これは、子どもの月齢が8～9ヶ月であったということがひとつの要因ではないかと推測する。育児語使用に関する研究は、初語を話し出す1歳前後の子

どもがいる養育者を対象としたものが多い。言語獲得と関連させた研究が主流であることから、今回対象とした8～9ヶ月児との母親のやりとりにおいては、育児語の目立った使用を見出すのは難しかったかもしれない。

ただ、早川(1981)が養育者の「思いやり」から生まれた言葉が育児語であると言っていたように、子どもの立場に立った話しかけや母子の共有行動に付随するオノマトペを頻繁にみることができた。例えば、子どものズボンを取がすときに母親が「シューン」と言ったように、である。これも広い意味で育児語と見ることができるであろう。また、食事に関して「アーン」「モグモグ」「ゴックン」といった言葉を繰り返し使用していることがわかった。

広い意味での「子どもに向けたことば」は確かにあった。言語獲得を支えようとする意図が養育者側に強く起こる初語出現以降と、それ以前とは育児語の使用にも質の違いがみられる可能性が示唆された。

## ii. マザリーズについて

どちらの母親においても、録音された音声の至るところで音声特徴としてのマザリーズを確認することができた。その中でも特に、母親と子どもの音声コミュニケーションが活発な場面において、際立ったマザリーズを聞き取ることができた。ここでは、場面「こちょこちょ」を紹介する。

<場面「こちょこちょ」>

オムツ替えが終わり、母親が子どもに対して話しかけている。くすぐり遊び「こちょこちょ」が始まる。「こちょこちょ」が終わると、母親は次の遊びに子どもを誘っている。注目したい母子間における音声のやりとりは「こちょこちょ」が行われた1分間である。表2に、「こちょこちょ」を介した母子のやりとりの様子を示した。

山田 栞里

表2 場面「こちょこちょ」

時間 分:秒	音声(母)	音声(子)	母と子の音声の様子	
序	2:04	こちょこちょこちょこ ちょこちょ	母が「こちょこちょ」を始める。 「こちょこちょこちょこちょこ ちょ」という一息ごとの発声4回は ほぼ同じ時間間隔をおいて開始さ れている。さほど声は高くない が、「こちょこちょ」を繰り返す 度に少しずつ声が高くなってい る。子は声を出していない。	
	2:06	こちょこちょこちょこ ちょこちょ		
	2:08	こちょこちょこちょこ ちょこちょ		
	2:10	こちょこちょこちょこ ちょこちょ		
展 開	2:14	こちょこちょこちょこ ちょこちょ	母が間合いの取り方に変化をつけ 始める。	
	2:17	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょ	一息の「こちょこちょ」の中で、 緩急の変化を少しつけるようになる。 また、語尾に向かって声の高 さの上り下りの変化を顕著に聞き 取ることができる。	
	2:20	こちょこちょこちょこ ちょ		
	2:22	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ こちょこちょ	母が「こちょこちょ」の後に 「びゅっ」を付け始める。 「びゅっ」は弾むような印象を受 け、上がり調子である。一息の 「こちょこちょ」は、その後に続 く「びゅっ」に向かっていくよう に、だんだん音が高くなり、 「びゅっ」で最高音に達する。し かし、2分37秒の「びゅっ」は下が り調子である。また、「びゅっ」 に到達する前に少しの間がある。	
	2:27	びゅっ		
	2:29	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ		
	2:33	びゅっ		
	2:34	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ		
	2:37	びゅっ		
	2:39	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ		
	2:42	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ		
2:44		フンヒッパン	子の笑い声が母の「こちょこ ちょ」の終盤に、聞こえ始める。	
ク ラ イ マ ッ ク ス	2:45	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこ ちょこちょこ	少し声が高くなり、だんだん速く なる。	
	2:46		フン	母の声に続けてすぐさま、子が笑 う。
	2:47		フッ	
	2:48	んーふふふふふ	フン	子の笑い声と母の笑い声が重な る。
	2:49	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょ		前よりも高い声になる。
	2:49		ンフフッ	母の「こちょこちょ」に時間を移 さず子が笑う。 さらに母の声が高くなる。
	2:52	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ こちょこ		
	2:54		ンフフッ	子が笑う。
	2:55	こちょこちょこちょこ ちょこちょこちょこちょ ちょこちょ		前の声の高さが持続される。
	2:56		フッ	子が笑う。
2:57	んふふふふ		母も笑う。	

	2:59	こ、こちよこちよこちよ こちよこちよ		母が「こ」を溜め、次の「こちよこちよ」を子に期待させているようである。その後の「こちよこちよ」は一気に速度が上がる。それに対する子の笑い声は、母の声の速度とリズムに一致してゐる。その様子は、間髪を入れない「サイクルの交換」(岡本,1982)を聞いているようであった。また2分59秒～3分1秒の間、母の声はこのやりとりの中で最も高くなっている。
	3:01		ンフフ	
	3:01	こちよこちよこちよこちよ		
	3:02		ンフフフ	
解決	3:02	こちよこちよこちよ		子どもの笑い声が聞こえなくなる。
	3:04	やあ		母の「やあ」は息が抜けるような声色であり、遊びの終止を表現しているかのようである。

左から2番目の列に、経過時間を示した(分:秒)。次の列に母親の音声と子どもの音声をできるだけ聞き取った通り忠実に記述した。それらの音声の特徴を一番右の列に書いた。ここでは、「こちよこちよ」が始まる2分4秒～3分4秒の場面を抽出している。表2からわかるように時間経過とともに、母子の音声コミュニケーションが、「序」「展開」「クライマックス」「解決」に分類されている。この分類の根拠とともに、以下、分析の詳細について述べる。

2分4秒からの「序」部分はまさにこれから始まる遊びの出だしの部分に当たり、比較的落ち着いた声で「こちよこちよ」が始まる。また、一息ごとの「こちよこちよ」の始まりは、ほぼ同じ時間間隔である。「こちよこちよこちよこちよこちよ」と言っでは子どもの反応をうかがっているかのようである。母親の音声はさほど高くないが、繰り返される度に少しずつ高くなっている。「序」の部分では、子どもの声は聞こえない。

2分14秒の「展開」部分は、母親が間合いの取り方に変化をつけ始めるところである。母親の「こちよこちよ」は、「序」の部分とは異なる速度とイントネーションになる。2分22～37秒までのところでさらに変化が生じ、「こちよこちよ」に「びゅっ」という弾んだ音声加えられるようになる。この部分にあるほとんどの「こちよこちよ」は「びゅっ」に向かっていくようにだんだん音が高くなり、「びゅっ」で最高音に達し

山田 栞里

た。2分37秒の「びゅっ」のみは、下がり調子であった。まだ子どもの声は聞こえない。2分39秒には「びゅっ」が取り外され、やや低い声の「こちょこちょ」になり、一旦遊びがリセットされたかのように聞こえた。そのすぐ後の「こちょこちょ」の終盤で、子どもがはじめて笑い声を出す。

この笑い声をきっかけにして2分45秒から「クライマックス」が始まる。この部分では、母子の「嬉しい」、「楽しい」という快の情動が高まって共有されている様子がうかがわれる。2分59秒から3分2秒の間では、その状態が音声に最も顕著に現れている。母子の音声における「サイクルの交換」(岡本, 1982)は、子どもの期待を予期したかのような声の溜めを踏み台にスピーディーになっている。子どもの音声の速度やリズムは母親の音声に一致し、同調しているかのようにであった。また、母親の音声はこのやりとり全体の中で最も高くなっている。3分2秒「こちょこちょ」からの「解決」の部分では、子どもの笑い声が聞こえなくなる。母親はすぐに子どもの十分に満足した様子を察してか、「やあ」と力の抜けたような声色で遊びを終結させている。

この母子の音声コミュニケーションが始まる前は、音声言語によって情報が伝達されるという場面であったのに対して、この「こちょこちょ」は明確な言語情報が伝達されない「遊び」であった。そのため、母親はほとんど「こちょこちょ」としか言っていない。しかし、「母と子の音声の様子」の記述からわかるように、「こちょこちょ」にはいくつもの声の高さ、速さ、リズムのバリエーションがあることがわかった。

この一連の音声コミュニケーションの中には、「序」「展開」「クライマックス」「解決」という物語のような流れを読み取ることができる。この「序」「展開」「クライマックス」「解決」という言葉とこうした物語的な分類の仕方については、マロックとトレヴァーセンの理論 (Malloch & Trevarthen, 2009) によるところのものである。

分析の結果明らかになったことは、マザリーズ音声は母親から乳児に向けて一方向的になんらかの役割を果たすものであるというよりは、双

方的な音声コミュニケーションの中でマザリーズの特徴を帯びた音声が発せられるということである。その誘発された音声が、さらに母子間の楽しさや喜びの感情を支え、促す様子も見られた。松田(2015)は、マザリーズらしさは「快感情」が決め手となっているのではないかと示唆している。まさに、母子の音声コミュニケーションが成立したときに生まれる「喜び」がマザリーズの基盤になっていると言えるだろう。

## 6. おわりに：結論にかえて

「育児語に関する調査」では、女子大学生の育児語の知識が30年前と比べて減少していること、きょうだいの存在が育児語の知識に影響していることがわかった。子育て場面を実際に見聞きしているかどうかが育児語の知識の形成に影響を与えている可能性が示唆されたのである。仮にそうだとすれば、子育て場面に自然に触れる環境の中で自然に見聞きして知識を形成することが望ましいと言えるのかもしれない。

「母子間における音声のやりとりに関する調査」では、育児語に関しては目立った使用を取り出すことができなかったものの、子ども向けに用いている音象徴の性格をもつ言葉が頻繁にみられ、広い意味での育児語であると捉えることができた。マザリーズに関しては、その音声特徴が顕著であった場面を分析した。その場面は、3.(3)でまとめたマザリーズの意義との関連性を見ると「i. [感情を支えるコミュニケーション]を支える」、「ii. やりとりを誘発し、活性化する」の2つの意義に結びつくことがわかる。また、抽出した場面の母子の音声コミュニケーションの構造が、マロックとトレヴァーセンの理論に重なることがわかった。母子の音声コミュニケーションが一連の物語のような流れを描けたとき、互いが音声を引き出しあっているため、どちらの音声がきっかけとなってやりとりが持続されているのかわからない状態になる。そのような状

山田 菜里

態の中に生まれる母子の共有可能な情動が、母親のマザリーズをよりいっそう引き出すのである。

子ども向けの発話は子どもとの相補的な関係の中で引き出されるものである。そのような関係の中で、マザリーズや育児語の意義や知識を形成されることが望ましいと言えるのかもしれない。

赤ちゃんへの声かけや話しかけに悩む養育者に対して、言葉かけや声かけを知識として教え込むというよりは、自然な関わり合いの中で音声コミュニケーションの方策を身につけるような環境整備が望ましいことが本研究を通じて示唆された。具体的な方策を導出するまでには至らなかったものの、子育てに携わる大人がマザリーズや育児語を「子育ての知恵」として自然に身につけられる環境をどのように整えていくかを、今後の大きな検討課題とし、研究を発展させていきたい。

## 註

- <sup>1</sup> 清水 (2015) にはそうした母親の悩みが取り上げられているほか、2015年12月12日に放送されたNHK・Eテレ「すくすく子育て」において赤ちゃんへの言葉かけに関する母親たちの悩みが取り上げられた (<http://www.sukusuku.com/contents/26183>、2016年6月27日参照)。
- <sup>2</sup> 音の振動が、人の鼓膜を通して伝える周波数のことをいう。
- <sup>3</sup> 一般的には韻律のことを指すが、ここでは、マザリーズの特徴に示されているもの全般を「プロソディ」としたい。
- <sup>4</sup> 快な状態で発声される「qoo」「goo」といった音に近い音声である。
- <sup>5</sup> 「腕を急に激しく二、三回振ったかと思うとしばらく停止する。そしてまた激しく動かして停止する」(岡本,1982 p.29) とあるように、赤ちゃんの反応に関する動きの特徴から「激発」という言葉を使用しているのであろう。
- <sup>6</sup> 日本語は音節より小さいモーラと呼ばれる構造を基本単位にしており、主に、「子音+母音」「母音のみ」「特殊拍(っ・ー・ん)」から構成されている。
- <sup>7</sup> 性別を特定しないために兄弟姉妹をあわせて「きょうだい」と表記することがあるので、ここではそれを用いる。



- <sup>8</sup> 「犬」「猫」「牛」「ねずみ」「すずめ」「鶏」「魚」「手」「腹」「目」「足」「咳」「ごはん」「雷」「捨てる」「座る」「汚い」「叱るときの詞」である。

### 引用・参考文献

- 浅野倫子 (2015) 「ことばとコミュニケーションを科学する玉川大学赤ちゃんラボ第8回ことばの音のイメージを足掛かりに言語記号の使い手になる」『発達』36 (141) pp.96-99
- 岡本夏木 (1982) 『子どもとことば』岩波書店
- 小椋たみ子 (2006) 「養育者の育児語と子どもの言語発達」『言語』35 (9) pp.68-75
- 鯨岡峻 (1997) 『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房
- 梶川祥世 (2003) 「乳児の言語音声獲得」『日本音響学会誌』59 (4) pp.230-235
- 児玉珠美 (2015) 「0歳児におけるマザリーズの効果に関する一考察」『名古屋女子大学紀要』61 pp.261-270
- 清水悦子 (2015) 『赤ちゃん苦手かも?と思ったら読む本』主婦与生活社
- 志村洋子 (1996) 「母親の音声と乳児の相互作用」『周産期医学』26 (1) pp.63-67
- 志村洋子 (2000) 「マザリーズは“永遠の響き”」『小児保健研究』59 (2) pp.227-229
- 志村洋子 (2004) 「マザリーズとその音楽的意義」『日本音楽教育事典』pp.629-630
- 常田美穂 (2007) 「乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割」『発達心理学研究』18 (2) pp.97-108
- 友定賢治 (1987) 「女子学生を対象にした育児語調査」『文教国文学』20 pp.22-30
- 友定賢治 (1997) 『全国幼児語辞典』東京堂出版
- 友定賢治 (2005) 『育児語彙の開く世界』和泉書院
- 中川愛・松村京子 (2006) 「乳児との接触未経験学生のあやし行動—音声・行動分析学的研究—」『発達心理学研究』17 (2) pp.138-147
- 庭野賀津子 (2005) 『親乳児間における音声相互作用の発達の研究—音響分析による測定から—』風間書房
- 早川勝広 (1981) 「育児語と言語獲得」『言語生活』351 pp.50-56
- 早川勝広 (2006) 「言語獲得と育児語」『言語』35 (9) pp.62-77
- 林安紀子 (2003) 「乳児における言語のリズム構造の知覚と獲得」『音声研究』7

山田 菜里

(2) pp.29-34

- 林安紀子 (2005) 「音声知覚の発達」『音声言語医学』46 (2) pp.145-147
- 林安紀子・馬塚れい子 (2010) 「生後5～13ヶ月齢児の音声知覚発達に関する研究—語の切り出し能力の発達について—」『日本音響学会聴覚研究会資料』40 (6) pp.525-530
- ナップ, マーク・L. (1979) 『人間関係における非言語情報伝達』 牧野成一・牧野泰子共訳 東海大学出版会
- 正高信男 (1993) 『0歳児がことばを獲得するとき』 中央公論新社
- 松田佳尚 (2015) 「対乳児発話(マザリーズ)を処理する親の脳活動と経験変化」『ベビーサイエンス』2014 (14) pp.22-33
- 馬塚れい子・松田佳尚・ドナ・エリクソン・志村洋子ほか (2010) 「子どもの言語発達に合わせて親もマザリーズ(母親語)の脳内処理を変化—育児経験、性差、個性による親の脳活動の違いが歴然—」理化学研究所 HP プレリリース 報道発表資料 (2010年8月10日)
- 麦谷綾子 (2009) 「乳児期の母語音声・音韻知覚の発達過程」『ベビーサイエンス』2008 (8) pp.38-49
- 村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (2007) 「養育者における育児語使用傾向の構造と育児語使用を規定する要因」『島根大学法文学部紀要社会文化学科編』4 pp.17-30
- 村田考次 (1960) 「育児語の研究—幼児の言語習得の一条件として—」『心理学研究』31 (6) pp.359-364
- レギアスティ, M. (2014) 『乳児の対人感覚の発達—心の理論を導くもの—』 大藪泰訳新曜社
- Ferguson, C.A.. (1964). Baby Talk in Six Languages. *American Anthropologist*. 66. pp.103-114
- Malloch, S. & Trevarthen, C.. (2009). *Communicative Musicality : Exploring the basis of human companionship*. Oxford university Press.